

パプと ジェットと

おお おお もり
大きな 大きな 森

なつやす 夏休みです！ トーマスと ケイトとお母さんと
とう お父さんと パプは、お母さんの 弟 ベンおじさんが
いなかに 持っている 農場に 招かれ、みんなで
やって来ました。

ケイトと トーマスは、ベンおじさんの お手伝いを
するのが 大好きです。牛の 乳しぼりをしたり、
めんどりの 産んだ 卵を だれが一番 たくさん
みつけられるか 競争しながら 集めたりしました。

きょう 今日、特別な 日です。ベンおじさんの 大きな
くろ 黒い ラブラドル犬が 産んだ 子犬たちが 少し
おお 大きくなったので、町に 売りに 行くのです。



「お願い、お父さん。1匹もらってもいい？」
お父さんが子犬たちを箱に入れているのを見ながら、
ケイトがたずねました。

「うちにはもうパプがいるだろう？」とお父さんが
言いました。

「パプは、トーマスのペットだもの。」ケイトは、
かわいい黒い子犬をなでながら言いました。

お父さんとお母さんは顔をみあわせ、それから
ほほえみました。お母さんが言いました。「わかったわ。
でも、ちゃんと世話をするのよ。そして、森の中に
入らせないように気をつけてね。まだちっちゃいから、
まいごになるかもしれないわ。」

ケイトはすぐさま1匹の真っ黒な子犬を選んで、
ジェットという名前を付けました。

「わたし、ジェットのめんどろをよくみるわ！」と
ケイト。

「ぼくも、手伝うからね。」と、トーマスも言って
くれました。



お父さんと ベンおじさんは、ほかの子犬たちの
新しい家を見つけるために、近くの町へ出かけて
行きました。ケイトと トーマスは、急いでたのまれていた
残りの雑用に取っかかりました。お手伝いが終われば、
外へ行って新しい子犬と遊べるからです。

お手伝いが終わると、お母さんは子どもたちに
外へ行って遊んでいいと言いました。「夕食の
鐘が鳴ったら、帰ってくるのよ。」

ケイトは、大事そうにジェットをだっこして外に
出ました。トーマスとパプは、後に続けました。
にわとり小屋のわきを通り過ぎ、ヤギ小屋を
通り過ぎ、馬屋も通り過ぎました。そして、ベンおじさんの農場の
はずれまで来ました。

子どもたちは、ぼうを投げてジェットに取って来る
ことを教えました。そして、また投げるのです。パプも、
ジェットの後を追いかけて、じゃれ合ったりして、
いっしょに遊びました。ケイトは2匹の犬たちのために、
おやつも持ってきていました。



しばらくして、お母さんが家の前に出てきて
夕食の鐘を鳴らすのが聞こえてきましたが、
子どもたちには、まだ遊び始めてそれほど時間が
たっていないように思えました。「お母さんが、
夕食の鐘が聞こえたら帰って来るようにって
言ってたわ。」とケイトが言いました。

「あ～あ。まだそんなに遊んでないのになあ。」と
トーマス。

「じゃあ、あとほんのちょっとだけ遊んでから
行きましょう。」そう言いながら、ケイトはぼうを
拾って、できるだけ遠くに投げました。ジェットは
ぼうを追いかけて、勢いよく走って行きました。
けれども、ぼうを拾う代わりに、ジェットは
そのまま走り続けて森の中に入ってしまった。
と止まらなかったのです。ケイトは大声でジェットを
よびました。トーマスも森の入口までジェットを
追いかけて行きましたが、ジェットのすがたは
どこにも見当たりません。パプは、暗い森に
向かってほえました。



トーマスは またもや ^{はし はじ}走り始めましたが、
ケイトは、^{もり あぶ}森が ^{ところ}危ない ^{とう}所だと お父さんが
^い言っていた ^{おも}ことを ^だ思い出して ^{さけ}さげびました。

「だめよ、トーマス！ ^{もり なか はい}森の中に入っちゃ だめ！」

トーマスは もうちょっと ^{さき}先まで ^い行って、
^ひ引き返して ^{かえ}きました。「ジェットは ^{どこ}どこにも
いないよ。」

「わたしたち、^{ゆうしょく}夕食の ^{かね}鐘が ^き聞こえた ^{とき}時に
^{かえ}帰るべきだったのよ。」 ケイトが ^{かな}悲しそうに
^い言いました。

^{ふたり}二人は ^{すこ}もう少し ^ま待って ^{さが}さがしてみましたが、
ジェットは ^み見つかりません。お母さんの ^ま待っている
^{いえ}家まで、^{かな}悲しそうに ^{かえ}帰って ^い行きました。

ケイトは ^な泣きながら、ジェットが ^{もり なか}森の中に
^{はし}走りこんで ^こもどって来なかった ^{かあ}ことを お母さんに
^{はな}話しました。二人とも、^{ふたり}家に ^{かえ}帰るはずの ^{とき}時に
すぐに ^{もど}もどらなかつた ^こことを ^{くや}くやんでいました。



ゆうしょく た おと
夕食を食べていると、かみなりの音が
してきました。やがて あめ はじ
雨がふり始め、まどに
あ
ピシャピシャ 当たりました。

よる まえ いの
その夜、ねる 前に ケイトは 祈りました。
「イエス様、どうか、ジェットを 守ってください。
さま まも
ジェットが うちに 帰る 道を見つけれられますように。」

「アアメン。」と、トーマスが ささやきました。

つぎ ひ あさはや な ごえ とも
次の日の朝早く、おんどの 鳴き声と共に
お
起きた トーマスと ケイトは、ベンおじさんの
てつだ い
お手伝いに行きました。ヤギの 乳を しばり、
ちち
にわたりの 卵を 集めるのです。でも 今日は、
たまご あつ きよう
いつものように 走り回って 遊ぶ 気には
はし まわ あそ き
なれませんでした。いつもは 元気に はしゃぎ回
まわ
る パプでさえ、しず
静かです。



トーマスと ケイトは、ジェットのことや、
もり あめ 森や 雨の こと^{かんが}を 考えていました。そして、
こんど かあ 今度 お母さんに なに^い 何か 言いつけられた^{とき}時には、
したが おも すぐに 従おうと 思いました。その時です。
おお 犬が にわとり小屋の^{ご や ほう} 方で、ワンワンと
大さわぎしているのが^き 聞こえてきました。

「パプったら。にわとりを おどかしちゃ
いけない ことくらい、知っている はずよね。」
ケイトは ひとり^{ごと}言を 言いながら、どうしたんだろうと
おも 思って、にわとり^{ご や ほう}小屋の 方^いに 行ってみました。
パプは 興奮^{こうふん}して、にわとり^{ご や ほう}小屋の すみ^{ほう}の方^みに
む 向かって ほえています。その^{した} 下^{ほう}の方^みを 見てみると・・・
ジェットが います！ ずぶぬれで どろに まみれて
さむ 寒そうですが、ケガも なく^{げん き} 元気そうです。

「ジェットだわ！ ジェットが^{かえ} 帰ってきたのよ！」
ケイトは トーマスに^む 向かって さけびました。



ケイトは子犬のジェットをだきあげました。

トーマスも来て、ケイトとジェットにうでを
まわしました。お母さんとお父さんとベンおじさんも、
このさわぎを聞きつけて、外に出てきました。

「イエス様はケイトのお祈りに答えて
くださったね。」 ジェットの頭をなでながら、
トーマスが言いました。

ケイトは、もううれしくてたまりません。
その日以来、お母さんが夕食によぶと、
ケイトとトーマスとジェットとパプは、だれが
いちばんはやいえ 家につけるか、競走するように
なりました。

お
終わり

